

大阪インターナショナルチャーチ

マタイ 4 : 19 「釣りに行ったことがありますか」

ジョセフ・トッティス牧師（アバイド・カルバリチャペル大阪）

2016/7/17

皆さん、おはようございます。お久しぶりです。今日、このようにして戻ってこられて光栄です。

私たち夫婦は、ちょうど6年前の2010年7月19日に大阪にやってきました。この日付を忘れることはありません。私の誕生日だからです。その数日後、このOICで副牧師として正式に奉仕を始めました。そして、皆さんは最初から私たちを教会家族に暖かく迎えてくださいました。月日の経つのは早いものです。

では、一言お祈りいたします。

天の父よ、この交わりを感謝します。再びあなたの聖なる御名をともにたたえる機会を私たちに与えてくださり、ありがとうございます。あなたのみことばを今から学びますが、どうか私たちの心を開き、語ってください。イエスの御名によって祈ります。アーメン。

今朝はまず、皆さんがびっくりするかもしれない聖書の豆知識をお分ちしましょう。

イエスは、未信者に教会に行きなさいとは一度もおっしゃらなかったと知っていましたか。群衆の前に立って、「罪人の皆さん、教会に行ったほうがいいですよ」とはおっしゃいませんでした。この世の失われたたましいに向かって、教会に行けとは一度も言われなかったのです。反対に、ご自身のからだである教会に向かって、世に出ていくようにおっしゃいました。

マタイ 28 : 19-20

28:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、28:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

皆さんもご存じのとおり、これは大宣教命令と呼ばれる個所です。

では、「今朝はいつもと違うことをします。イエスが行けとおっしゃったので、行きましょう。皆さん、立って外に出てください。そして、会う人すべてに福音を分かち合ってください」と私が言ったら、どう思いますか。わくわくしますか。それとも、家の用事を急に思い出して帰ろうとしますか。こんなことを言われたら、ちょっと怖くなりますか。不安になったり、疑心暗鬼になったりしますか。

たくさんの方がそのように感じるでしょう。でもなぜでしょう。それはイエスの命じられたことではないでしょうか。イエスがともにいてくださると約束なさっています。では、何が問題なのでしょう。それは、私たちの肉です。

イエスはおっしゃいました。

マタイ 26 : 41b

「心は燃えていても、肉体は弱いのです。」

イエスが「行きなさい」とおっしゃっても、私たちの肉が「いやだ」と言うのです。つまり、

イエスの大いなる宣教命令 + 私たちの大いなる弱さ = 大いなる問題
というわけです。

しかし、イエスは問題を解決してくださる偉大なお方です。
ですから、使徒 1 : 8 で、私たちにその解決策も与えてくださっています。

使徒 1 : 8

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

言い換えると、イエスは「恐れることはない。聖霊がおられるから」とおっしゃっているのです。聖霊に力づけていただくことが、私たちの大いなる弱さに対してイエスが与えてくださる解決策です。

ですから、

「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。 16:16 信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。」 (マルコ 16 : 15b-16)

納得しましたか。でもどうやって私たちは証人になればよいのでしょうか。どのようにして福音を分かち合えばよいのでしょうか。

イエスは、ペテロとその兄弟のアンデレを弟子として召されたとき、このようにおっしゃいました。

マタイ 4 : 19

「イエスは彼らに言われた。『わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。』」

人をとる漁師になる目的や目標は何でしょう。それはもちろん、人をとることです。

では、その過程に注目してください。まず、イエスは「わたしについて来なさい」とおっしゃいました。これは、弟子としての召しです。次に、イエスは「してあげよう」とおっしゃいます。弟子として訓練されることの目的は、ただ取り方を学ぶだけでなく、人をとる漁師になることです。

私は漁師です、と言いながらまったく漁に出かけない人がいたら、その人は本当に漁師なのでしょうか。漁師であるということは、ノウハウを持っているということでしょうか。それとも、実際に漁に出ている行為があるからでしょうか。もちろん、実際の行為でしょう。知識はただ、それをもっと上手にできるように助けてくれるだけです。

イエスが「わたしについて来なさい」とおっしゃったら、私たちは何と返事するのでしょうか。「はい」と言いますか。「いやです」と言いますか。それとも、迷いながら、「状況によります。どこに行かれるのですか」と言うのでしょうか。

イエスはおっしゃいました。

「14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」 (ヨハネ 14 : 2-3)

イエスについていけば、最終的には天国に行くでしょう。素晴らしいことです。

では、その日を待っている間は何をすればよいのでしょうか。釣りに行くのです。「いや、釣りはあまり好きじゃないんだけど」と思う人もいるでしょう。その気持ちはよくわかります。私も、子どものころ、釣りが大嫌いでした。

早朝、まだ暗いうちに起きて、どこか遠くの湖に行かなくてはなりません。テレビのアニメも見られない場所です。そして、水辺までいろんな釣り道具を運ばなくてはならないし、それから釣れるまで、ただ何時間も待つだけです。やりたくないことばかりです。

私の場合、だいたい15分くらい経つと退屈になって、沢ガニや虫を見つけたり、何か興味の惹かれるものを見にいったりします。何か釣れたら、私が戻って来るまでそのまま釣り針にひっかかっているだろうと思っていたからです。

今の時代は、関西スーパーで魚を買うほうが、釣りに行くよりよほど安くて手軽だと思います。けれども、残念ながら、関西スーパーで人のたましいを買うことはできません。

一方、釣りが好きな人もいます。チャレンジ精神があるのでしょうか。釣れたときの達成感があるから、それまでじっと待つ価値があると感じるようです。

「そういう人はいいいけれど、私は釣りが好きじゃないから」と言う人もいるでしょう。それはそれでかまいません。けれども、ひとつ聞かせてください。実際、今まで何回釣りに行ったことがありますか。

統計によると、クリスチャンだと言う人の90-95%が、これまで一度も誰かに福音を分かち合ったことがないそうです。

もしあなたがそれに当てはまっているなら、やったこともないのにどうして釣りがきらいだとわかるのでしょうか。釣りに行ったことがあるけれど好きではない、という人には、どんな釣り方をしたのかお尋ねします。もしかすると、違う釣り方なら好きになれるかもしれません。

先ほどお話したように、私は子どものとき、湖で釣りをするのが嫌いでした。本当に退屈でした。けれども、34歳くらいのときに、ある友人が沖釣りに連れて行ってくれました。これは本当に楽しい経験でした。何も釣れない状態で何時間も舟に座っていましたが、それでも楽しめました。そして、ついに引きがありました。引きが強かったので、必死に引き上げると、なんとアオザメの子どもでした。すごく楽しかったので、いつかまた行きたいと思います。

何が言いたいかというと、釣りの方法はいろいろありますが、原則は同じだということです。その原則とは、私たちが人をとる漁師であるかないか、ということです。

一度も釣りをやってみなければ、釣れることはありません。そして、一度も釣れたことがなければ、どんな楽しみを逃しているかを知ることはありません。

特定の釣りのしかたが好きでないなら、神が心を変えてくださるよう祈るか、楽しめるような方法を教えてくださるよう祈ってみてください。

こんなふうに考えてみてはどうでしょう。

ある人が学校で学んでいます。語学、医学、工学、なんでもけっこうです。けれどもその人は、学校で学んだことを将来に活かそうという気はまったくありません。しかし、それではただの学問です。

イエスの弟子である私たちは、そんなふうに毎週毎週学びつづけるだけではいけないのです。そうではなく、学んだことを実生活に活かさなければなりません。

そういうわけで、ヤコブは、「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」（ヤコブ 1 : 22）と言ったのです。

皆さん、釣りに行く準備はできましたか。

家族や友人、近所の人、同僚、またはまったく見知らぬ人にでも、御霊が導かれたら福音を分かち合う準備はできていますか。どんなことをその人たちに伝えるでしょう。

「神さまはあなたのことを愛していますよ」と言いますか。そうしたら、「ありがとう。えっと、八百万（やおよろず）の神のうちのどの神さまが私のことを愛しているの？」と言われるかもしれません。「それとも、ヒンズー教の 3 億 3 千万の神さまのひとりかな？」などと返されたらどうでしょう。

私たちは、もう少し具体的な話をする必要があります。だからこそ、福音を伝えなければならないのです。パウロはこれを次のように定義してくれました。

コリント第一 15 : 1-4

15:1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があるあなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。 **15:2** また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。 **15:3** 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、 **15:4** また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、

キリストは私たちの罪のために死なれ、葬られて、聖書の示すとおりに三日目によみがえられました。 **1-2** 節によると、これが「この福音によって救われる」と言われる福音です。

私がペンテコステ派の牧師だったら、「信じる人はアーメンと叫んでください」と言うでしょう。けれども、そのとおりにだと思っているなら、なぜ多くのクリスチャンは福音を分かち合うのがそれほどむずかしいと感じるのでしょうか。とくに、日本ではそうではありませんか。

奥山実博士は、もともと仏教や神道を信じていましたが、後にクリスチャンになり、日本の宣教師訓練センターの所長となりました。

奥山師は、日本にクリスチャンが少ない理由について、次のように語ります。

「日本人は、真理や原理よりも人間関係を重んじるからです。そういうわけで、日本人にとって、いわゆる『和』はもっとも大切なもののひとつであると言えます。」

そのとおりでしょいか。

もし本当のことを言ったら、それを良く思わない人や気分を害する人がいるだろう、というシチュエーションに出くわしたことはありますか。きっとそういう経験は誰にもあるでしょう。

そういう恐れがあるから、本当のことを言うのをためらってしまうことがあるのではないのでしょうか。

真理が常に何よりも大切だと思わない人は少なからずいます。

文化や伝統を守ること、社会の期待に応えることが、真理よりも優先されることがあります。

そして多くの場合、人との和を保つことが真理よりも大切にされてしまいます。

真実を犠牲にしてまでも、人間関係を穏やかに保とうとします。

日本語のことわざに、「出る杭は打たれる」というのがあります。けれども、どちらが自由を得ているか考えてみてください。打たれて周りに迎合する杭でしょうか。それとも、真理のためにはみだしてしまう杭でしょうか。

イエスはおっしゃいました。

ヨハネ 8 : 32 「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

何から自由になるのでしょうか。私たちの罪からです。そして、心の中の孤独感や虚しさからです。他の人に何と言われても、神が愛してくださり、ともにいて私たちの人生にご計画をもってくださると信じる自由です。

福音の真理を分かち合うことについて、使徒パウロはこう語ります。

「私は福音を恥とは思いません。福音は、・・・信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」（ローマ 1 : 16）

私たちがもそう言えるでしょうか。

ここで、もうひとつの統計をご紹介します。

近年、日本では毎年少なくとも 2 万 5 千人の人が自らの命を絶っています。平均して、毎日約 70 人にのぼります。この日本には、家族や友人、社会や文化、宗教に希望を見出せず、自分自身にも希望を失って生きることをあきらめる人が日々いるのです。

私たちが主にあって持つ希望を、絶望している人たちに分かち合うと、その人たちはどう反応するでしょう。

「それはけっこうですね。けれども、私自身が信じてもないあなたの信仰にどうやって希望を見出すと言うのですか」と答えるかもしれません。でも私なら、「じゃあ、他にもっとよい方法がありますか」と言うと思います。すべての望みを失ってうつ状態になっているときに、他にもっとよい方法があるのでしょうか。自殺でしょうか。自殺は生き残るための方法にはなりません。しかし、福音を一度も聞いたことがない人は、イエスをひとつの方法として挙げることもできないのです。

私たちの小さな教会でも、たった 10 ヶ月の間に、家族を自殺で亡くした家庭が三軒もありました。ふたりの女性は息子さんたちを、そしてある男性は妹さんを亡くされました。私たちの群れは平均して 30 名ほどが集う教会ですから、一年に満たない間に一割の人がこのような経験をされたこととなります。

自殺についてあまり口にしない世間の雰囲気もありますから、本当はもっと多くの人があるようなつらい経験をしているのかもしれませんが、親類や友人なども含めれば、きっとそうでしょう。

「釜石の奇跡」という話を聞いたことがありますか。これは、2011 年 3 月の津波を小中学生 3 千人が生き延びた話です。

津波が来る以前に、片田敏孝・群馬大教授は、宮城県の子どもたちに聞き取り調査をしていました。宮城県は、20 世紀の地震と津波で大きな被害を受けた場所です。もし地震が来ても、親や祖父母が避難しないので、自分たちも逃げない、という子どもたちの返答に、教授はショックを受けました。「子どもたちは、大人の行動を観察しているのです」と教授は語ります。片田教授は、もしその子どもたちが津波で命を落としたら、それは親だけでなく日本という社会全体の責任だと考えました。「子どもたちが自分の身を守るために、私も何かしなければならぬと思

ました」と教授は言います。こうして、片田教授は津波防災教育で、避難の重要性を子どもたちに教えるようになりました。「一般的に、人間は避難すべきだとわかっているにもかかわらず、他の人が逃げようとしていないと、自然と躊躇してしまうのです。」と語ります。それで、教授は小中学生たちに語りました。「あなたたちがまず勇気を出して、避難する一人目の人になってください。そうすれば、他の人たちもついてきます。そうしたら、他の人たちの命を救うことにもなるのです。」

そして、それが現実になりました。

その日の午後、マグニチュード 9.0 の大地震が襲い、釜石東中学校の生徒たちは、すぐさま高台へと避難しはじめました。その迅速な行動に、隣接する鶴住居（うのすまい）小学校の児童や職員も続き、やがて多くの近隣住民も追随しました。安全な高台を目指して、中学生は小学生の手を引いて走り、無事避難しました。そして、大津波は学校も町も飲み込んでしまいました。

同じように私たちも、まず勇気を出して、家族や文化、社会的・宗教的しがらみなど、何であれ私たちの永遠の救いを危うくするものから避難する一人目の人にならなければなりません。私たちが責任をもって自分の身を守るなら、他の人が救われる可能性も出てきます。

私はクリスチャンになったばかりのとき、祖父の葬式に参列しました。隣には、妹のティナが立っていました。ティナはクリスチャンではありませんでした。祖父の墓を見降ろして、妹は言いました。「これで終わりなのね。みんな最後にはお墓に入って終わりよ」と言いました。私はすぐに、「ティナはそうかもしれないけど、僕は違うよ。僕は天国に行くからね」と答えました。

イエスが約束しておられるとおりです。

ヨハネ 11 : 26 「また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」

私は信じます。

それから三カ月ほど経って、妹も姉も母もクリスチャンになりました。つまり、私は釣りに行ったのです。私は生まれたてのクリスチャンでした。まだ主と歩み始めて数カ月でしたが、釣りに行ったのです。

まだ釣りに行ったことがないなら、皆さんに分かっていただきたいことがあります。あなたが大切に思っている「魚」が、明日もそばにいる保証はありません。ですから、釣りに行ってください。手遅れになる前に、愛を持って真理を分かち合ってください。

祈りましょう。

天の父よ。恵み深いあなたの愛と赦しを感謝します。私たちの周りには、あなたを知らない人たちがいます。あなたがその人たちを私たちの周りに置かれたのでしょうか。誰にも明日は保証されていません。ですから、あなたがその人たちの心を開いてくださり、あなたの愛を受け入れることができるよう助けてください。みこころであれば、私たちの心を整えて、そのお手伝いをさせてください。あなたの御子を離れては、私たちは何をすることもできません。あなたの聖霊なしに、私たちには力はありません。あなたにすべてを明け渡し、お願いします。どうかこの一日、あなたのみこころどおりになりますように。私たちの一日をご支配ください。イエスの御名によって祈ります。アーメン。